

ナイスの視線で、日常の楽しみをお届けする、西成発の地域情報誌

Take free!

なな

1 月号

vol. 143

謹賀
新年

特集

だじだじ

「遊び心を忘れずに」
鶴見橋3丁目付近にて撮影



🏠 ぐちやまぜの交流の場 ソーネZone

わが「ゆくとあい」のワンフロアの約2倍、総面積1000㎡のソーネZoneがオープンしたのは2018年4月のこと。名古屋市区にある築45年480戸の愛知県公社大曽根住宅の1号棟1階に、市民リサイクル拠点「ソーネしげん」、朝6時30分にオープンする「ソーネカフェ」、無添加・国産小麦パン「わっぱん」が看板商品の「ソーネショップ」、会員制

2018年1月からゆくとあいは居住支援法人のなかま入り。まちの人の相談の中で「このまちの公営住宅や古い木造住宅をもっと活かさなきゃ。」そんな気持ちがふつつあふれてくる。ヒントを探しにいろんなとこへ、いろんなひとに。

ぐちやまぜ

② できちゃうかもまちづくり

レンタルスペース「ソーネホール」、地域のかけ込み寺「ソーネそつだん」と、多彩な5つの合築施設がうまれた。運営するのはNPO法人わっぱの会。1970年代の郊外施設収容型の障がい者福祉に異議を唱え、地域で障がい者と「共に生きる、共に働く。」を合言葉に、名古屋市の障がい者運動を推進してきた。

わっぱの会は1984年から始めた「わっぱん」の製造販売を軌道に乗せると、1990年代からは「共同生活体（共に生きる）」や「共働事業所（共に働く）」づくりから、障がい者の地域生活を支える拠点づくりへと名古屋市内に着々と広がりをつくっていった。2000年代には、イタリアの社会的協同組合と出会い、障がい者に限定するのではなく排除された人や生活困窮者も包摂する働く場づくり（社会的事業所）を進めている。この延長線上に、高齢化率が4割に迫る大曽根住宅の1階にぐちやまぜの交流の場「ソーネおぞね」（以下「ソーネ」）を設けた。



その狙いは何だろうか。「つながりづくり？」「まちづくり？」と早合点しつつ代表の斎藤縣三さんにお話を聞いた。

🏠 偶然の産物

でも、あっさりとその期待は裏切られた。はじめた動機は「まちづくり」という抽象的なものではなく、次の「しごとづくり」だった。

津島市で運営されている市民主導型のリサイクル事業「しげんカフェ」には、市民から持ち込まれた資源を買





取ポイント（買取価格）と引き換える資源買取センターと、そのポイントを利用できるカフェレストランが併設されている。他方で、資源買取センターの仕分け作業といった業務などは地域の高齢者の活躍の場（仕事）になっており、消費者と就労者をつなぐ先行例をつくっていた。

一方、当時の県公社は高齢化が進む大曽根住宅で150戸ほどの空家を抱えており、民間活力を導入して問題解決を図ろうとしていた。公募条件は70戸の空家と1階のスーパー跡地の活用。再生プランに立候補しようとしていたのは、高島平団地など空室の目立つ老朽団地でサービス付高齢者向け住宅「ゆいまゝる」を展開する株式会社コミュニティネット。そして再生プランのパートナーとして声をかけたのは、わっぱの会だった。わっぱの会のほうでも1階（総面積1000㎡）の半分500㎡であれば求めている条件とも合致するので、しげんカフェプロジェクトをスター

トすることにした。でも、残り半分の500㎡が埋まらない。

オープンまでの準備期間は家賃が免除されていたものの、2018年4月からは年間670万円余の家賃がかかる。しげんカフェでは車のお客さんもあるから駐車場も必須で、20台分を用意し、あわせて年間800万円近くの出費になる。しげんカフェだけでは割が合わないし、場所がもったいない。やるからには中途半端にしたくない。そこから急ピッチで全体像を見直し、1億円を銀行から借り入れて設備投資することにした。こうして完成したのが今のソーネである。

■ 商売として成り立たせる

大曽根住宅だけでなく、周辺にはすぐ北に1800戸の市営住宅の他、様々な公営住宅があり、高齢化率の高いエリアで事業を回すには地域の高齢者に愛されることが欠かせない。大

加えて、居住支援担当の相談スタッフを増員した。

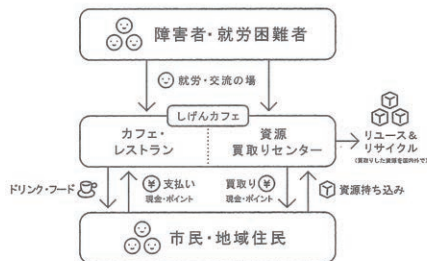
もう1つは、さらに仕事をつくることだ。ソーネしげんに集まったリサイクル品の中で付加価値の高い商品を丁寧に分け、同じ並びにある大曽根住宅1階の空き店舗を借りてリサイクルショップのオープンを準備している。また、元商社マンが、ソーネショップにある障がい者作業所のアンテナショップ「みんなのわ」の商品を取り扱ってもらおうと百貨店や民間スーパーに営業をかけている。アンテナショップというよりもセレクトショップと位置付けて地域を飛び出し、販売量を増やしていこうという目論見だ。

■ 地域はマーケット

斎藤さんの話には「孤立などの地域課題を解決したい」という直接的な言葉はなかった。あくまで、地域はお客さん・マーケットであり、事業として成立するかどうかを見据えていた。し

しげんカフェとは

「しげんカフェ」はカフェ併設の資源買取センターです。
家庭の資源を現金やポイントで買い取り、
ポイントはカフェのドリンクやフードに交換できます。
障害者や就労困難者がいきいき働きながら、
地域住民がリサイクルやリユースの大切さを学ぶ場です。



型スーパーやコンビニなどの競合店も近くにあり、ただサービスを提供するだけでは成り立たない。そこで、市民リサイクル拠点「ソーネしげん」で貯めたポイントを使えば、カフェやショップを割安で利用できるというサービスを導入した。会員制レンタルスペース「ソーネホール」の活用をソーネ全体の利用につなげようと8月まではレンタル料を無料にした。さらにモーニング文化の根強い名古屋で愛されるために開店時間を朝6時30分にした。11月末でソーネしげんのポイ

かし、規模や効率性で競っても大企業には敵わない。となれば、こだわり商品の開発や地域から愛されることで対抗していかなければならない。つまりは「ファン」になってもらう共感型のマーケットをつくるしかない。だからこそ、お客さんの困りごとである地域の課題が「しごとのタネ」にも見えてきて、いいサービスを提供しようとかかわる。ふたを開ければそんな「できちゃったまちづくり」につながっているように感じた。

まだまだ事業はスタートしたばかり。経営的にも楽ではないソーネのことを「笛吹けど踊らず」と自嘲気味に語る斎藤さんだが、社会的不動産屋、遺品整理屋、宅配弁当、ジビエ料理、地産地消、防災対策などなどやりたいことがあふれ出てきて止まらないというその言葉から、同じく悪戦苦闘中の「ゆくとあい」の今とこれからを重ね合わせ、たくさんエネルギーとヒントをいただいた。

文責：西田吉志・田岡秀朋

にしなりもん

西成にもまだまだ発掘されていない文化資源・社会資源は存在するはず。これら西成産のモノやコトを「にしなりもん」と名づけ、その由来やエピソードを辿っていきます。

豊臣秀吉も愛した 天下茶屋

今回は西成区のまちでも普段ではあまり知られていない史跡・岸里の天下茶屋跡を紹介する。はじめはどこにあるのかよく知らなかったが、天下茶屋公園付近の散歩道を歩き、その先を曲がると見えてきた。どうやら有名な歴史上の人物が関わっているようで、興味が湧いてきた。

そもそも、なぜ「天下茶屋」という名前になったのだろうか？ 今から400年以上前、豊臣秀吉が大阪城から住吉大社へ参拝に行く途中に、紀州街道沿いにあった屋敷で休憩し茶の湯を楽しんでいた。この屋敷が「天下の茶屋」や「殿下の茶屋」という意味合いで「天下茶屋」と呼ばれ、周辺の地名に転化した。屋敷には池や井戸もあった。
約5000平方メートルもある敷地には屋敷・茶屋などを備えていたといわれている。茶屋



には、名水のほまれ高い泉があり、秀吉はこれに「恵の水」と名付けた。その跡は芽木家とともに邸内に保存されていたが戦災で焼失してしまった。

天下茶屋は、豊臣秀吉と縁の深い千利休の師匠・武野紹鴎^{たけのしょうお}ゆかりの地としても知られている。また、江戸時代には、紀州藩主などの諸大名も宿泊したと伝えられ、さらに明治天皇も住吉行幸の途中に立ち寄っている。鉄道唱歌・関西参宮南海編の64番に「治まる御代の天下茶屋 さわがぬ波の難波駅 いさみて出づる旅人の 心はあとにのこれども」と天下茶屋のことが謳われている。いざ、天下茶屋跡を見に行ってみると、天下茶屋屋敷が焼失したため昔の面影はなく、現在は、くすのきの大樹と

ている。

みんな食堂

日時…毎月第2土曜日12〜13時
(一部変更の場合もあり)
場所…にしなり隣保館スマイルゆ〜とあい
参加費…大人300円、子ども100円

文責…山村裕太

お詫びと訂正

本誌12月号の「にしなりもん」でご紹介した喫茶「あとりえ」の外観写真が別店舗の「ESPRESSO」の写真となっていました。取材にご協力いただいた喫茶「あとりえ」様、そして「ESPRESSO」様にお詫びいたします。左記に正しい写真を記載し訂正いたします。



土蔵、石像だけが残っている。周りには建物やマンションが建っていて一見どこに天下茶屋跡があるのかわからない状態であった。

今回、このような史跡を見つけたがまだまだ知らない西成のまちがいくつも隠れていることがわかった。自分の知っているまちでも、ちよつと違う道や周りを散策するのもいいかもしれない。きつと今まで見たこと感じたことのないような体験ができるだろう。

みんな食堂

いつもはここで西成区の飲食店を紹介しているが、今回は少し趣向を変えて、ゆ〜とあいで実施している「みんな食堂」を取り上げたい。

「みんな食堂」は高齢者や子どもを対象に、参加者の居場所づくりや友人づくりを目的に開催している。メニューはカレーとサラダ。カレーは西成支部女性部の手作りの家カレー風で少し甘口。一人暮らしではあまりカレーを作



ることがない参加者には喜ばれている。前回は12月8日に実施し、約30名が参加。カレーは少し量多めだが、ほとんどの方が完食し、なかにはおかわりをされる方も。カレーを食べながら、みんなと和気あいあいと会話を楽しみ、笑顔が絶えない場になっている。

参加費は大人300円、子ども100円。毎月第2土曜日に実施、わいわいゴハンを食べたいなという方はぜひ来てください。

次回は1月5日「ゆ〜とあい3周年みんなが主役の記念祭」と合わせて開催。なんとこの日はカレーが無料となっ

【沖田一志】事務所の引っ越し作業中です。整理下手でモノが増え続けているせいか、思ったよりも沢山の箱が並んでいます。作業が落ち着いたら古い資料をデータ化してモノを減らすつもりです。



【佐々木敏明】日を次ぎてわれ彼岸まで親し距離安息も知らで死す子ら三島の忌冬広場孤鳥は寿命かぞえおり



【田岡秀朋】本厄の年も終わった！大過なく過ごせるよう、多動を自粛してきた。今年は少し多動を解放して、積極的に動いてみよう。早速、2月16・17日はソーシャルファームサミット in 大阪だ。





西田 和代(にしだ かずよ)さん
西田さんは、10月から始まった「ゆ～とあい みんな食堂」の呼びかけ人。毎月第2土曜日の正午から、ゆ～とあいの1階で開催しています。小学校で給食調理のお仕事を活かし、料理で地域の団らんを演出します。
女性が活躍する社会や地域住民の居場所づくりを考える西田さんは、こども食堂からヒントをもらって、大人も含めて「誰でもおいでよ、一緒に食べようよ」というアイデアを思いついたそうです。お腹の空いた方、興味のある方、お手伝いをしてくれる方、気軽に寄ってください。今回は料理上手なおとなりさんをご紹介します。

些事争論

『憲法問答』

些事でも何でも気になったらあれこれ考えてみよう。いいこと思いつくかもしれないし。気づいたら西成にたどり着いていた、或るオタクのもっさり系コラム。

2回続けて憲法の本を取り上げるのもなんだが、今回は改憲論議関連の本を紹介。憲法やら立憲主義やらを否定なく考えさせられる昨今、本書は著者名そのものが耳目を集めるインパクトを持っている。勢い、その内容に興味をそえられるのだが、期待を裏切らない中身になっている。

対談はほぼ、橋下がこれまでの解釈や見解にあえて疑問を投げかけ、新解釈を試みようとするのに対して、木村が、橋下の疑問と既存の解釈がどの程度整合するのか、新解釈としてアリなのかを検討する、という構図になっている。あの手この手で自らの主張を通してとする橋下の姿勢は「やり手弁護士」そのもの。一論者としてはすごく魅力的だが、政治リーダーになると歯止めが利かなくなりそうな危険も漂わしている。印象論はこれぐらいにして内容にも触れてみたい。

本書で何度も繰り返されているように、二人の対談で得られた最も大きな収穫は「手続法・論の不在」が明らかになったことである。この件は沖縄の辺野古基地移設問題でも本質をなしている。簡単に紹介しよう。

木村によると、誰が米軍基地の設



置場所を決定するのかを定める明文規定(手続法)がないばかりに、政府は、日米地位協定の2条を以って内閣の存で決定できると考えている。しかし、外国との条約の一つにすぎない日米地位協定では、国内法として内閣の権限を根拠付けることはできない。本来であれば、特定の自治体に不公平な負担が生まれないように、憲法95条に基づいて特定自治体を制限する法律には住民投票が必要だ、と結んでいる。

自治体の自治権を大きく制約する基地の設置に関して、地元住民の意見を公に反映させるプロセス、つまり手続法がない。政府の強引な手際は歪みを生み出し、そのシワ寄せが「座り込み」という抵抗運動となって現れている。決してワガママを通そうとしているのではなく、そうせざるを得ない「憲法事実」(橋下)が存在するのだ。

6 3くふうたま 週間 2 畳

「家は暮らしの宝箱でなければならない」
建築家ル・コルビュジェの言葉が脳裏に浮かぶ。
空き家が問題になるとき、長く親しんだ家だからこそ「思い」と、自身では使い道が見つからないというジレンマが存在する。
そんなとき「この先も誰かに大切に使うて貰いたい」と心から思えば、閉じた未来に光が差し込む。まだ見ぬ住まい手の「イキイキと暮らす」姿をありありと想像されたい。損得勘定のハードルを下げ、その未来に投資することで、馳せた思いに応えんとする価値観がじわりと広がっていくことだろう。
何よりの安心だ。

たとえば音を奏でる道具でありながら工芸品でもある「楽器」。名器と呼ばれるものは修復を繰り返しながら数百年をかけてさまざまな手に渡り、価値を高め続ける。そうして時間を掛けて柔らかく深みのある音を奏でようになった楽器は、やがて弾き手の思いを汲み取るのだぞ。

特に自然素材は「生きている」と言われる。素材ごとの個性に人は技術を以って応える。技術で制するのではなく、会話をしながら「より生きるカタチ」を探る共同作業。

常日頃から何気ないものへの感性を持ち、今あるものを最大限に活かしたなら、日々の暮らしは自然と輝きたすだろう。(安田拓也)

ハナレバナレになった人とまち。
くらしの窓から、紡ぐヒントを探してみる。

いきる

ふと思う。僕たちは家や街に住まわされているかもしれない。

木村は続けて言う。日米地位協定や集団的自衛権など日本の安全保障の枠組みは、沖縄が米軍基地の大部分を引き受けてくれることを前提にして作られている。「本土」は後ろめたさを感じながらも目をつぶっているのが一番というシステムである。その不当性から「本土」を目覚めさせるためには、「手続きをちゃんとやっていく必要がある」と。

憲法を変えるということとは、わたしたちがどう責任を引き受けるのかというこのようだ。木村が、教育無償化に関する橋下の改憲案を『国民意思の発露の機会としての憲法改正手続き』というのを見たことがない発想なので面白いですね。」と評しているように、本書には橋下の独創的なアイデアがたくさん披露されている。対談のように「大人の対応」で接してくれば冷静で建設的な議論もできそうなものだが、「それでは誰も見向きもしない」というのが、政治家・橋下の言い分。難しそうな人だ。

ハンブレイ・T

橋下徹・木村草太『憲法問答』徳間書店 2018年



【安田拓也】オーケストラの演奏。知らない曲なのに心にスッと染込む。色んな楽器の音の集まりというよりも、指揮者が奏でる一音という感じ。見事なチームプレー。苦手なだけに嫉妬する。



【西田吉志】新年あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします。2019年もありがたいたいに、今年もよかったなあと思える年にしたいですね。



【寺島史視】新年あけましておめでとうございます。今年はゆ～とあいをより多くの方に知ってもらいたい、ゆ～とあいの利用客を増やすにはどうすればいいかを考えていきたい。



【谷口円】昨日と今日とで何がかわるわけでもないのに、年が明けると、不思議と新鮮な気持ちになります。とりあえず今年は人間ドックに行く事が目標です(怖いのでものすごく勇気がいる)。

「社会を知って」「社会に踏み出す」
そんな L's College Plus の取り組みを
紹介していきます。

vol.9

1 年の感謝を伝えよう

練習をしました。普段の講座では鉛筆を使っているの、ペンを使って書く練習もしました。

何度も練習して、いざ本番。緊張のあまり字を間違えてしまった方もいましたが、感謝の気持ち込めて一枚一枚書くことができました。

今年の送付先は、昨年の 7 組から 10 組になり少しずつ活動の場とつながりの輪が広がっていることを実感します。今年も支えてくださる皆様への感謝の気持ちを忘れずに、猪突猛進していききたいと思います。（文 松尾 有希生）



皮算用 胸算用

にしなり隣保館の館長が日々の出来事について胸のうちに皮算用していることを語っていくよ。



通信 ふらすアルファ

あけましておめでとうございます。

4 月からゆーとあいにお世話になり、1 階のヒューマンライツ協会事務所の方をはじめ、この街の人やナイスの人に温かく見守っていただき、利用者、スタッフ共に感謝しております。今年もこの街と共に歩んでいけたらと思っておりますのでよろしくお願いします。

年末には 1 年間お世話になった方へ年賀状を書きました。担当は 4 月からプラスを利用して 3 年生が中心です。みなさん今まで年賀状は先生や友達には書いたことがありますが、会社や企業の人に出すのは初めてなので、まずは講座で年賀状の勉強です。干支の話や、年賀状の値段が変わったことや、年賀状の書き方、送る期間などを勉強しました。また 4 月からの活動を振り返って、10 組のお世話になった人を書きだしていききました。勉強してからは、年賀状を買いに行くところから始めます。年賀状を購入してもすぐには書きません。長い企業の名前や、部署や役職を葉書の中に収めるために、文字のバランスや位置を確認するために何度も

12 月になって今年を振り返ると、「ゆーとあい」の館長として最も大きな出来事は町会に加入したこと、町会長に推薦されて出城東町会の町会長になったこと、そして昨年、連合町会長が亡くなって空席になっていた長橋の連合町会長に推薦され就任したことだ。民設・民営の隣保館としては地元に着した事業を行うことが求められる。

館のスタッフも積極的に町会活動に協力・応援してくれている。と同時に、館の事業を地元住民に発信できることは大変ありがたい。地域の校区社協や民生委員さんとの距離も近くなった。仕事は増えたが、これを機に今後の事業展開を考えたり地域における「ゆーとあい」の存在感を高めたりすることが大事だ。地域の人たちの抱える問題を共有・解決し、「住んでよかった」と思える楽しい地域を築くためにしっかりと役割を果たしたい。（寺本良弘）

い湯がげん

『千鳥百年』を知った

キノハノヲチタ カキノキニ
オツキサマガナリマシタ

お寺でひろつた おちつばき
あんまりきれいで 母ちゃんの
おみやに つないでかへつた

短いのに何とも深い自由詩だ。

この詩の作者は田中千鳥、山陰地方で大正年間を生き、7 歳で逝った。5 歳で詩を習い、わずか 2 年の間に 80 編を詠み、母が『千鳥遺稿』として残した。その存在を知る人は僅かだったが、『未来世紀ニシナリ』を撮ってくれた田中幸夫監督が『千鳥百年』という映像にした。それでボクも千鳥を知った。言葉が映

像になれるのかなと疑問だが、田中監督は「記憶映画」にしたと言ってるから期待したい。表題に「一日は長い、一年は短い、一生はもっと短い」と記したのは、旧知の山田哲夫さんかな？ 唸らせる。

ボクの記憶に障害を持つわが娘の保育所時代が蘇った。その頃集団に溶け込みにくかった娘は「足のこといわれると、言葉ひっこむねん」と呟いた。何とも短いが深い言葉としてずっとボクの記憶に残っている。自由詩というのは何にもとらわれず感じたままを言葉にするのだが、そこに現れる空白が魅力的だ。障害を持って社会に加わったば

かりの娘と友達の間には、まだ先入観のない広い空白があったのだらう。それを想像すると胸が詰まったが有意義でもあった。幼い千鳥の療養生活もまたそうだったのか。いつぱいの想像を巡らし言葉にする千鳥の「一日は長く」有意義で、彼女は短い時空を駆けた。

千鳥の生きた大正間、千鳥の人生と同じように短い。明治と昭和に挟まれて忘れ去られそうなほどだ。しかし、この時代にかの水平社も駆けた。様々な社会運動も芽生えた。まだいつぱいあった空白に夢を描けた時代だったのかも。ボクの知識が浅薄かもしれないが、日本の自由詩も大正の頃に登場したはずだから、幼くとも千鳥は先駆だったことになる。先駆の千鳥の見たオツキサマが、我が先駆の水平社が見た人の世の光と重なる。

卑近な話だが、政治や社会運動の文言に自由詩はなく、比喻すれば「七五調」になる、形式に



富田一幸

人間のしあわせ、福祉のあり方、そして新しい社会の結びつきを求めて、これからも「いい湯かげん」のテーマ探しに出かけます。

流れる。その分空白がない。だから「保育所落ちた、日本死ぬ」なんて呟きにも目くじら立てた。障害者雇用改竄でも「移民法」でも想像力が乏しい。ボクは法定雇用率に代わる「共生雇用」や、外国人の参政権を想像する。間もなく選挙のシーズンになるが、自由詩のように政治や社会課題も謳ってみたいものだと思う。

ボクがこの拙文を映像を観ないまま書いてるのは、ネタに困ったからではない、とてもワクワクしてるからだ。近いうち『千鳥百年』の上映会をやってみよう。

【山村裕太】人間は 10 代のときに聞いた曲が最も印象に残り、良い曲に感じるらしいです。まさか 30 歳になって「あいみょん」にハマると思いませんでした。



【若松司】例年になく忘年会の日程がたくさん入ったけど、「年を忘れてる場合じゃないの」という思いが心の片隅に。わざわざ機会をつくって忘れなアカンほどの記憶力もないし。



地域の縁を心でつなぐ



今年もお正月を迎えさせて
頂きおめでたいことですが、
昔、お正月に、どくろを竹の棒
の先につけて「ご用心、ご用心」
と京の街を歩いたお坊さんが
いたそうです。このお坊さん
こそ、あの有名な一休さんだ
と伝えられております。一休
さんは「門松は冥土の旅の一
里塚。めでたくもあり、めでた
くもなし」という句を残して
おられます。お正月は喜ばしいですが「それだけ
死ぬ日が近づいていることを分かっているのだ
すか?」「この瞬間を大切にしていますか?」と
問われているのです。

かつて先生から「明日がある、明後日があると思
っている間は何もありはしない。肝心な今がない
んだから。」と教わりました。過去は「今」が過ぎ
去り、未来は「今」が未だ来らずという意味です。
「今、今、今」の連続が一生です。明日を迎えられる
保証があるわけではないので「今」を大切に出来
なければ、人生もいつの間にか終わってしまいます。
「今」を大切にすることから始めましょう。今年は
「1年が早かった」ではなく「1年がありがたかった」
と言える年にしたいものです。

松向寺 通法

部落問題を面白いと思え始めたこの秋

地域と関わる仕事をして四半世紀を迎えたが、部落問題というと正直「難しい」という意識が強かった。自分が生まれ育った地域のために働く
うえで必要だと自覚し、不十分ながらも勉強してきた。

そんな意識は最近まで変わらずにいたが、今年度は助成金を活用して
「こどもに部落問題を伝える事業」を実施することになった。こどもにど
のように伝えていけばいいのか改めて学ぶために、さまざまな学習会に
足を運んだ。

テーマは「地域の若者・高齢者から見たこども部落問題」、「皮革と部落
問題」、映画「ある精肉店のはなし」、「ネットと部落問題」、「小・中学校教
師から見た部落問題」など。様々な立場の方からたくさんのことが学べた。

その中で特に、皮革や食肉と部落との関係について、とてもわかりやす
く納得できたことが印象に残った。こどもたちにもわかりやすく、面白
く部落問題が伝えることができれば、近い将来きっと地域の未来は変わ
ると感じた。

COUNT 2.99

隣保館などで事業を行う中で感
じたことをつぶやいて、西成の
まちづくりに役立てていきます!



ナビ編集長 寺嶋公典

smile
ゆーとあい

にしなり隣保館

にしなり隣保館「スマイル ゆーとあい」は、地域コミュニ
ティ全体が抱える課題の解決をめざす民設民営の福祉施設
です。日々悩んでおられる困りごとはありませんか?お悩
み解決のためにできることをいっしょに探しましょう。

ナビ 1月号 (vol.143)

発行日:2019年 1月 1日(創刊日:2007年 1月 1日)

発行:株式会社ナイス

住所:大阪市西成区長橋 3-6-33

電話:06-6563-1156

E-mail:info@nice.ne.jp

url:http://www.nice.ne.jp/

編集長:寺嶋公典

編集:沖田一志、佐々木敏明、田岡秀朋、

寺島史規、西田吉志、安田拓也、山村裕太、

若松司(あいうえお順)

イラスト:hidarimaki デザイン:谷口円

facebook: <https://www.facebook.com/navi.nishinari/>

facebook

